

# I. スポーツ論

## 1. 近代スポーツ批判—その研究史概観

早川 武彦

本小論は、当初川口教授退官記念論文としてまとめ、箱根の研究会で報告したものであるが、章立ての関係で他の論文と差し替えたため、そこには掲載しなかったものである。また、本年報に掲載するに当たって、字数の関係から、「1. 近代スポーツ（論）の再考論」だけにとどめ、「2. 近代スポーツの批判的環境状況」および「3. 近代スポーツ批判の批判的課題」の部分は削除した。

はじめに

近代スポーツから現代スポーツへの変革期にさしかかっている今日、「する・みる」スポーツなど新しいスポーツ論の展開を考える上で近代スポーツへの批判がどのようになされてきたかを見ておくことは不可欠な作業である。わが国でも「ニュースポーツ」の登場と相まって、近代スポーツについての評価が見直され始めてきている。しかし「近代スポーツ批判」（研究）の流れについてはほとんど整理されていない。従来この問題は、スポーツ社会学やスポーツ史の領域で扱ってきているのであるが、スポーツ社会学研究やスポーツ史における「社会史」的方法が用いられ始めたばかりであり、それほど体系だったものが確立していないこともあって、研究の流れを概観する取り組みは欧米で漸く緒についたところである。

わが国では、山下高行が「スポーツ社会学における再生産と生産の視角—方法論上の成果と課題によせて—」（『体育・スポーツ社会学研究10』1991）に、欧米のスポーツ社会学研究の方法論を理論的に整理・紹介し、スポーツ社会学研究方法論の課題に論究している他、各国研究の分析・紹介としては、以下に触れるような菅原禮（主に米

国）、阿部生雄、青沼裕之、松井良明、坂上康博ら（英国）、早川武彦（仏国）らのものがある。また、『体育の科学』（1994.9）誌が「近代スポーツ論再考」の特集を組み、各国の研究成果を個別的に紹介している。

しかし、わが国では、この面での研究は、ほとんど「紹介」の域を出ておらず、先行する欧米のスポーツ社会学研究に学ばざるを得ない状況である。また、わが国における「近代スポーツ批判」に関する研究の整理についてもなされておらず、今日この作業は急がねばならないときである。

そこで本小論では、このような問題意識から国内外の近代スポーツ批判の流れを、主要な研究論文をもとに国別（地域別）でクロノロジカルに概観し、新しく興ってきているスポーツ状況把握とその方向性を、グローバルな視点で検討していく資料作りとしての基礎作業に取り組むことにした。

以下の作業に当たっては、研究方法論上の違いは違いとして見ておくことにする。例えば、スポーツ現象にみられる「社会的行動とそれからの逸脱」というアメリカのスポーツ社会学に見られる機能主義的な「没価値」的把握からなされているものやネオ・マルクス主義的な方法をとるフランクフルト学派、さらには「機能主義的・進化論的傾向」とみなされるエリアス学派、「象徴的構造主義」（M. フーコー）を批判的にのり超えた「発生論的構造主義」（P. ブルデュー）にもとづく「文化的再生論」をベースにしたものなど。

なお、先行研究の整理に当たっては、以下の文献を参考にした。ジョン・W・ロイJr/ジェラルド・S・ケニヨン/バリー・D・マックファーソン編著；糸野豊監訳『スポーツと文化・社会』ベースボールマガジン社、1988（Loy, J. W., Kenyon,

G. S. & MacPherson, B. D. (eds.) "Sport, Culture and Society," Lea & Febiger, 1981) およびR. トマ「スポーツ社会学の生成、展開、現状」(R. THOMAS, J-L. LEVET, Sociologie du sport, PRESSES UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 1987)。山下高行「スポーツ社会学における再生産と生産の視角—方法論上の成果と課題によせて」(前掲)

## 1. 近代スポーツ(論)の再考論

近代スポーツ(論)の再考論はわが国でも最近活発になってきている。先に触れた日本体育学会の機関誌『体育の科学』が、94年9月号で「近代スポーツ論再考」を特集したのもその現れである。ここに登場する論者は、一様に「近代」という時代的社会的認識の再検討から競争原理や効率性・合理性に依拠した近代スポーツの社会的評価を問い直している。そこに見られるキーワードは、後近代、競争原理、民族スポーツ、宗教(稲垣正浩)、達成、批判的社会理論、人間学(高橋幸一)、近代スポーツ、完了した近代、進行する近代、共時的分析(佐伯聡夫)、近代化理論、スポーツ史(阿部生雄)などであり、これらをまとめてみれば近代の再評価、競争原理、達成、近代スポーツ批判、民族スポーツ、宗教と身体とになる。おそらくこうした論者らの関心の背後には、科学技術の発達、諸科学の進歩などによって示される研究の成果や新しいスポーツの胎動などがあり、それらが意識されているのであろう。だが、これらの「再考論」だけでは捉えられない側面が他にも存在しており、それらをも見ていく必要がある。

### 1) 近代スポーツ(論)批判の前夜：啓蒙的スポーツ論の時代

近代社会の発展と共にめざましい展開を遂げてきた近代スポーツは、新たな世紀を前にして大きな試練に立たされている。あまりにも肥大化し過ぎ、高度な技術を追求し、競争に終始し、経済的・政治的利益に引き回され、メディア・スポーツ

の登場と共に、跛行的な発展を余儀なくされてきているからである。こうした近代スポーツへの批判は、先進工業資本主義社会の経済発展を背景に、1960年代に、大衆化への気運が高まる時を同じくして発せられてきた。勿論、それ以前から労働者らのスポーツ要求を実現する闘いが、労働者スポーツ運動として、近代スポーツの誕生の時から取り組まれてきていることは見逃すことができない。そこでは、労働者や市民たちが、近代スポーツへ接近することを阻む組織的閉鎖性や倫理・道徳性の強調などに対し、これをブルジョワ・イデオロギーとして鋭く批判してきている。その主たる運動は、CSIT(国際労働者スポーツ委員会; 1946年)とその前身であるLSI(国際労働者スポーツ; 1913年)によってなされてきている。さらに組織的閉鎖性は、今日においても批判し続けられている問題である。

近代スポーツ批判のこうした前史を見ておかなければならないことはいうまでもない。しかしこれらの流れは、専らスポーツ運動の取り組みであり、近代スポーツを学問的な対象として取り上げるまでには至っていない。それは、1960年代から本格的に開始されると見てよいであろう。

もっとも体育の世界では、特に日本において、スポーツは教育的な観点から問題にされてきているが、それは、教材論としてあるいは方法論として取り扱われてきたものであり、スポーツがどのような有効性をもつのかという教育方法(内容)の問題として、学校という空間に限定したところで扱われているものであって、スポーツ論というにはあまりにも狭すぎるものとなっている。例えば、スポーツの価値をトータルに捉える枠組みは、学校という場だけでは無理がある。

ただ60年代以前にも学問的な取り組みがなかったわけではない。しかしその多くは近代スポーツを啓蒙する観点からなされたものである。代表的なものは、近代オリンピックの創設者であるP. ド・クーベルタンが説いたスポーツ・オリンピック論である。中でも『スポーツ教育学』(1922) (Pierre de Coubertin, PEDAGOGIE SPORTIVE, Cres

et Cie, 1922; LIBERAIRE PHILOSOPHIQUE J. VRIN, REEDITEE, 1972) は、近代スポーツの文化的な価値を歴史的、実践的、精神的・社会的側面から説いたもので、その精神は、近代オリンピックに求められている。彼のスポーツ論は、教育論から出発しているが、それは決して学校教育に限定されないスポーツ論であり、近代スポーツのもつ民主主義、・平等・連帯・平和といった積極的な価値を、老若男女、人種・宗教・階級・国家の枠を超えて人びとが享受することを論じたもので、啓蒙的スポーツ論の典型といえるものである。現在彼の著作は『P. ド・クーベルタン選集』にまとめられている。(COMITE INTERNATIONAL OLYMPIQUE; PIERRE DE COUBERTIN Textes choisis Tome I-III, Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, 1986)。その他、ドイツのC. ディームが『スポーツの本質と基礎』(Wesen und lehre des Sports, Weidmannsche Verlagsbuchhandlung, berlin, 1960; (福岡孝純訳、『スポーツの本質と基礎』法政大学出版局, 1966) を1960年に、それに先だってフランスのB. ジレが『スポーツの歴史』(HISTOIRE DU SPORT, PUF, 1948; 近藤等訳『スポーツの歴史』白水社, 1952) を1948年に著すが、いずれもクーベルタンのスポーツ論を下敷きにした啓蒙的なものである。

したがって啓蒙主義的なスポーツ論を脱し、近代スポーツがはらむ大衆化や社会的な拡大にともなって現れる社会的な問題に目を向け、このスポーツ現象を対象とした批判的な「スポーツ論」や「スポーツ社会学」研究などが学問的に取りあげられるようになるのは、スポーツが社会的に注目し始められる60年代であり、それはスポーツの社会学的研究の始まりを意味する。

## 2) 近代スポーツの社会学的批判の興り

当初、スポーツの社会学的研究は社会学者らの手によって進められてくる。比較的早くスポーツの社会学的研究に着手してきたといわれるアメリカでも、B. D. マックファーソンらによれば、G. ストーンが『アメリカのスポーツープレイ

とディスプレイ』(Gregory P. Stone, "American Sports: Play and Dis-play", in Mass Leisure, The Free Press, 1958; 香内三郎訳「アメリカのスポーツ」日高六郎監修『マス・レジャー論』、紀伊國屋書店, 1961) を1955年に、『アメリカのスポーツについての若干の考え』(Stone, G. P.: Some meaninngs of American sport, College Physical Education Association 60th Annual Proceedings, Washington D. C.: CPEA, 1957) を1957年に著した後、60年代後半にG. S. ケニヨン、J. W. ロイ, jrらが『スポーツ社会学の確立をめざして』(G. S. Kenyon, J. W. Loy, Jr: Toward a sociology of sport. " Journal of Health-Physical Education Recreation, "36:24-25, 69-69, 1965/ 桑野豊編訳『スポーツと文化・社会』ベースボール・マガジン社, 1988, p.19) に取り組んでからのことである。

G. ストーンは、「われわれの経済的・政治的生活が競技やあそび(play) にどんな関連を」もっているかに着目し、J. ホイジンガの「あそび論」をベースに、スポーツの内的性格として「競技と見世物」の関係を捉え、これを分析することで、アメリカ社会を映し出そうとした。したがってスポーツそれ自体の分析というよりも、それを「社会の鏡」つまり、「スポーツの中にアメリカ社会の諸矛盾、緊張関係が一定の屈折をもって投射されているもの」としてスポーツの背後の問題を串刺しようとしたものである。(香内三郎「解説」日高六郎監修『マス・レジャー論』1961, p. 240)。ただ、近代スポーツ批判という点では、焦点がずれているが、「競技と見世物」の関係を論じている点は、今日のメディア・スポーツの登場や、「する・みる」スポーツ論を論じていく上で大いに参考となるものである。

一方、最も早くスポーツの社会学的研究に取り組んだのは、ドイツで1910年にH. スタイニッサーが『スポーツと文化』(H. Steinitzer, Sport und Kultur, Munich, Verlag Deutsche Alpenzeitung, 1910) を、1921年には、H. リッセが『スポーツの社会学』(H. Reisse, Soziologie des

Sports, Berlin Reher, 1921) を著している。両者は、スポーツを文化と捉え、それを大衆がいかに享受すべきかを説いた。唐木国彦によれば、リッセは、数百万人の大衆がスポーツに参加する状況に目を向けた。これは、「これまでほとんど思いもよらなかった問題」関心であり、「新しい時代の文化の担い手をそこに見た」というのである。

(唐木国彦「文化としてのスポーツ」体育原理専門分科会編『スポーツの概念』不昧堂、1986, p. 234)。また、フランスのスポーツ社会学者R. トマは、リッセが「社会的な特殊問題」として「大衆スポーツの昂揚」が出現してきたのであるから、科学的な方法でこの問題を見ていかなければならない、としたことを高く評価している。(R. THOMAS, NAISSANCE, EVOLUTION ET ETAT ACTUEL DE LA SOCIOLOGIE DU SPORT; In R. THOMAS, A. HAUMOT, J-L. LEVET, Sociologie du Sport, PRESSE UNIVERSITAIRES DE FRANCE, 1989P.)。

しかしながら、リッセのこうした研究関心は、その後継承されず、第二次世界大戦後の経済的社会的成長期における余暇・スポーツの大衆的な拡大状況の到来までまたねばならなかった。

### 3) 近代スポーツ批判としてのスポーツ社会学

60年代は、先進資本主義的工業国を中心に、経済的な豊かさと政治的な安定を求めて、余暇(レジャー)への関心が、政治的・経済的に高められ始める時代として登場する。そしてその活動の中心にスポーツが据えられてくる。余暇政策は、政治的・経済的・社会的諸矛盾を隠蔽する手段として位置づけられたりする側面を持ちながらも、その位置づけと促進によって人びとの生活意識を変えていく役割を担うことになった。物質的な豊かさと余暇・自由時間の増大の背後には、利潤追求をめざす人間無視、オートメーション化など技術革新による生産力の質的な転換、それに伴う公害・環境破壊、健康不安など社会的な問題をも生じさせてきたが、これらの問題が、逆に人びとの政治的・社会的な関心を高めることになり、我が国では、地方自治体の革新が一気に進み、民主化

の波が生活におよび、自己の目覚めが始まることになった。そして文化・芸術・スポーツへと人びとの目を向けさせることになる。とりわけ、余暇におけるスポーツへの関心は高く、企業側にとっても労働者の側にとっても肉体的・精神的なストレスの解消にスポーツの果たす役割ははかり知れないものと意識され始めた。

スポーツは単に競技(大会)のためだけでない文化性を持っており、それらは、すべての人にとって必要な文化であるとする、スポーツ・フォア・オール思想が自覚されてくる。この観点から、近代スポーツへの、特に競争主義、勝敗主義、商業主義に対する批判が起こってくる。以下では、スポーツ史研究をも考慮しながら研究史を概観していく。

#### ①アメリカの流れ

アメリカでは、1950年代既に、D. リースマンが『孤独な群衆』(David Riesman, The Lonely Crowd; A study of the changing American character, Yale University Press, 1961; 加藤秀俊訳『孤独な群衆』みすず書房、1964)を著し、ピューリタニズムに縛られた労働によって作り出された「内部指向的な人間」、「孤独なる人間」から人々を解放するためにレジャーに着目する。レジャーによる新しい人間関係の可能性を求め、そこに「他人指向型の人間の自律性」を期待し、新しい生き方・生活スタイルの方向を示したのである。勿論ここでは、レジャーを意識することにあつたから、スポーツだけを問題にすることはしていない。ここで意識されたことは、レジャー・余暇のもつ人間的な意味や価値についてである。しかしレジャーへの意識化は、やがてスポーツへの関心を大いに高めることになった。こうした社会学的な視点をスポーツ問題に振り向け始めるのが、スポーツの大衆化が起こってくる60年代後半から70年代にかけてである。

先に見たように、G. ストーンやG. S. ケニヨン、J. W. ロイら、社会学者の手によってアメリカスポーツへの関心が醸成されてきていた。その上に立って、体育・スポーツ分野から社会科

学的な研究が開始されてくる。例えば、G. H. セイジは、1970年に『スポーツとアメリカ社会』(Sage, G. H., Sport and American Society, ADDISON-WESLEY PUBLISHING COMPANY, 1970)を手がけるが、そこでは、30数人から成る歴史学者、心理学者、社会学者、体育学者、スポーツジャーナリストらによって既に公表された論文を、米国のスポーツ遺産、スポーツと学校、スポーツと社会的地位、スポーツの社会経済的問題、人格とスポーツ、人種問題とスポーツ、女性とスポーツ、スポーツと社会の8項目に分類し、採録することで、多様な学問領域から新たなスポーツ問題への接近を試みた。ちなみに採録された論文の中には、1917年に書かれたF. L. ペイクソン (F. L. Paxson) の「スポーツの興隆」(Paxson, Fredic L. "The Rise of Sport," The Mississippi Valley Historical Review 4:144-168 September 1917) や、J. ホイジンガ (J. Huizinga) の『ホモ・ルーデンス』(1938年の翻訳、一部分抜粋) (J. Huizinga, Homo Ludens: A Study of Play Element in Culture, The beacon Press, 1950) やR. Cailloisの『あそびと人間』(1958年の翻訳、一部抜粋) (Caillois, R., Man, Play and Games, :The Free Press, 1961) などが含まれている。

G. H. セイジの関心は、やがて社会学者のD. S. アイツェン (D. S. Eitzen) と共同で『スポーツ社会学』(Eitzen, D. S., & Sage, G. H. " Sociology of Noth American Sport ", Wm. C. Publishers, 1978)としてより専門的な研究へと進んでいく。スポーツ社会学研究への関心は、時代と共に高まってくるが、それでもなおそのオピニオン・リーダーは、社会学研究に基礎をおいた研究者らである。北米ばかりでなく国際的なスポーツ社会学研究をリードしている、社会学者であるJ. W. ロイ、G. S. ケニヨンらは、1969年に『スポーツ・文化・社会』(Loy, J. W., & Kenyon, G. S. eds. "Sport, Culture and Society," New York Macmillan, 1969)を著したが、その後も改訂を続け、1978年にJ. ロイ、B. マックファーソン、G. ケニヨンと『スポーツと社会システム』(J. W. Loy , B. D. McPherson, G. S.

Kenyon, Sport and social systems , Addison-Weslisy Publishing Company, 1978) を出版したこともあって、1981年に新たにB. マックファーソン (B. MacPherson) を編者に加え、さらに1989年には、ロイ、マックファーソンとJ. E. カーティス (J. E. Curtis : 社会心理学・社会学) で『スポーツの社会的意味』(McPherson, B. D., Curtis, J. E., & Loy, J. W. "The significances of sport : an introduction to sociology of sport", Human Kinetics Book, 1989) を発刊し、スポーツが抱える現代的な問題を多面的な角度から提起してきている。この間、E. ダニングも『スポーツ社会学』(E. Dunning, The sociology of sport, Franck, Cast, 1971) を著しているが、1975年、D. ボールとJ. ロイ編著の3部、12章からなる『スポーツと社会秩序』(D. W. Ball & J. W. Loy, Sport and social order: contributions to the sociology of sport, Addison-Wesley, 1975) は、スポーツの社会組織分析として社会地理学の視点を導入している。また、社会心理学面からフロイド・マルクス主義の流れを汲んだD. M. ランダースが競技大会や人種差別問題を激しく批判した論文をまとめた『競技における社会問題』(D. M. Landers, Social problems in athletics, University of Illinois Press, 1976) も登場する。その他、最も(アメリカの)スポーツ状況を批判的に捉えたのは、A. グートマン (A. Guttmann) である。彼は、「祭から記録へ」という近代スポーツの発展を近代産業社会の中に見るのだが、その手法は、マルキストやウェーバー学派らのとるゲームは、それが発展する社会の鏡であるという解釈に基づいている。その理由は、これまで多くのスポーツ史やスポーツ関係論文が書かれてきているが、それらは、ほとんどスポーツの普及・発展を平面的に記述するに過ぎず、社会的な変化、とりわけ資本主義社会の発展・矛盾に巻き込まれているスポーツ状況をダイナミックに描いていなかったからである。近代スポーツは、古代や中世のそれとは明らかに異なり、世俗化、平等化、ルール化、合理化、官僚化、数量化、記録化を鮮明にしている。だが、こ

れらは、マルキストたちが言う資本主義的な発展とその矛盾の産物だけでもなければ、ウェーバー的なプロテスタンティズムからでも説明がつかない、両者の批判の中からえられる近代スポーツの特徴であるという。彼のこうした主張は、特にヨーロッパ、中でもドイツやフランスのスポーツ社会学者らの取り組み、ネオ・マルキストやウェーバー学派らの研究を批判的に検討するところからなされたものである。(A. Guttman, From Ritual to Record: The nature of Modern Sports, New York: Columbia University Press, 1978) pp. 15-55. Guttman, A, Sports spectators, Columbia University Press, 1986も参照。

## ②ドイツ・イギリスの流れ

そのヨーロッパでは、ドイツやフランスで60年代後半から近代スポーツの批判的研究が起こりつつあった。H. アイヒベルグ (H. Eichberg) が『産業文明におけるスポーツへの道』(H. Eichberg, Des Weg des Sports in industrielle Zivilisation, Nomos Verlag, 1973)、H. レンクは、「達成スポーツの基準化された比較を通して広がりを見せたが、それは、近代西欧の科学的経験的態度と密接に結びついている」(H. Lenk, Leistungssport: Ideologie oder Mythos?, p. 144)とするなど、スポーツが産業社会との不可分な関係にあることを説く。そして1920年代から興ってくるネオ・マルキストのスポーツ批評の流れに乗って、60年代後半からB. リガウアー (B. Regauer)、G. ヴィンナイ (G. Vinnai) らがスポーツの資本主義的、軍国主義的、帝国主義的性格を暴き始めた。

(A. Guttman, *ibid.* p. 65)

これらの研究に大きな影響を与えたのは、『近代スポーツの社会史』を著したA. ヴォール (Andrzej Wohl) である。(Andrzej Wohl, Die Gesellschaftlich-Historischen Grundlagen des Burgertlichen Sports, Pahl-Rugenstein Verlag, Köln, 1973. 唐木国彦、上野卓郎共訳『近代スポーツの社会史: プルジョア・スポーツの社会的・歴史的基礎』ベースボール・マガジン社1980) 彼の取り組みは、「スポーツの歴史的源泉を分析し、その

社会的役割を特徴づける」試みであり、プルジョア・スポーツの発展における矛盾として近代スポーツの限界、都市型スポーツ、女性スポーツの困難さ、商業主義・職業スポーツ・アマスポーツおよびスポーツの軍国主義化・ファシズム化を上げている。

イギリスでは1950年代からP. C. マッキントッシュ (P. C. MacIntosh) の『近代イギリス体育史』(PHYSICAL EDUCATION IN ENGLAND SINCE 1800, G. Bell & Sons Ltd., 1952: 加藤橋夫、田中鎮雄訳『近代イギリス体育史』ベースボール・マガジン社、1973)や『スポーツと社会』(P. C. McINTOSH, Sport in society, C. A. WAATTS & CO. LTD, 1963: 石川旦、竹田清彦訳『スポーツと社会』不味堂、1970)をはじめ、わが国に紹介されているものだけでも、以下に見るようなスポーツ史研究に社会史的手法をもちいた近代スポーツの成立過程からの見直しが精力的に進められている。ロバート・M. マーカムソン (R. W. Malcomson) の『英国社会の民衆娯楽』(Robert M. Malcomson, Popular Recreations in English Society 1700-1850, Cambridge University Press, 1973: 川島昭夫ら訳『英国社会の民衆娯楽』平凡社、1993)、N. エリアス (Norbert Elias) の「スポーツと暴力」(N. Elias, Sport et violence, Actes de la recherche en sciences sociales, No. 6, decembre, 1976), これを受けてE. ダニング (E. Dunning)、K. シアード (K. Sheard) の『ラグビーとイギリス人』(E. Dunning, K. Sheard, Barbrians, Gentlemen and Players. A Sociological Study of the Development of Rugby Football, Martin Robertson, 1976: 大西、大沼共訳『ラグビーとイギリス人』ベースボール・マガジン社、1983)そして最近では、ジョン・ハーグリーヴズ (J. Hargreaves) 『スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴史社会学』(J. Hargreaves, SPORT, POWER AND CULTURE: A Social and Historical Analysis of Popular Sports in Britain, Polity Press, Cambridge, 1986. 佐伯聰夫、阿部生男共訳『スポーツ・権力・文化—英国民衆スポーツの歴

史社会学』不味堂出版、1993) などがある。

この間の「スポーツ社会学研究」の方法論の問題については、冒頭にもふれたように山下高行の「スポーツ社会学における再生産と生産の視角—方法論上の成果と課題によせて—」(『体育・スポーツ社会学研究10』道和書院、1991)がある。ここでは、J. ホーンらの『スポーツ、レジャーと社会関係』(John Horn, David Jary, Alan Tomlinson(ed.) "Sport, Leisure and Social Relation" Routledge 1987)やJ. ハーグリーブスの『スポーツ論入門』(Jennifer Hargreaves' Theorising Sport: An Introduction, in Jennifer Hargreaves(ed) "Sport, Culture and Ideology" Routledge 1982)やJ. ハーグリーブスの『スポーツ、文化とイデオロギー』(Jhon Hargreaves, 'Sport, Culture and Ideology, in Jennifer Hargreaves (ed.) ibid.) 上で展開されている、「オルタナティブの理論」の紹介とさらにこの理論をめぐるW. モーガンの『ラディカルなスポーツ社会論—その批判と概念修正をめぐる—』(William J. Mogan "Radical Social Theory of Sport: A Critique and a Conceptual Emendation" S. S. J. Vol. 2 1985)の批判的見解を紹介し、「再生産から生産(=創る)論理」への必要性を提示している。

つまり、J. ハーグリーブスらが従来のスポーツ社会学研究に見られる行為者と社会の関係において「価値関与性」が欠如しているとして批判したのに対して、W. モーガンは、ハーグリーブスらの理論も「社会を単に再現するにすぎない社会理論」であり、「創造の論理をスポーツ固有の理論フレームとして準備することを不可能にする」と批判した。(山下高行、前掲、p. 15)

山下のこの論文は、スポーツ社会学研究の今日的意味と方法を概観したものとして今後検討していく必要がある。特に、スポーツと社会の関係における位置づけ及びそれを規定づけるスポーツ文化の価値的視点の導入は、近代スポーツから現代スポーツへの発展を追求していく上で重要な方法となろう。

この他英国のスポーツ史の研究状況については、

阿部生雄が『現代社会とスポーツ』によせた「補遺」「イギリス、スポーツ史、レジャー史の研究動向：1970-1989」(『現代社会とスポーツ』、P. マッキントッシュ著/寺島善一訳、大修館書店、1991、pp. 189-218)や山下高行「スポーツ社会学における再生産と生産の視角」(『体育・スポーツ社会学研究 10』道和書院、1991)、松井良明「社会史のインパクトとスポーツ史学—スポーツ社会学史の試みに向けて—」(『体育の科学』第41巻5号、1991、青沼裕之「イギリス労働者スポーツ運動史研究の現段階—Stephen G. Jonesの研究を中心に—」(『尚美学園短期大学研究紀要』第6号、1992)、坂上康博「英国近代スポーツ史像の再構成」(現代スポーツ研究会編『現代スポーツ研究』創刊号、1995)などに最近の研究動向およびその位置づけが詳細に論じられており、これまでのようなパブリックスクールを中心とした近代スポーツ論の叙述や中産階級から労働者階級へのスポーツの普及という伝播の単純な流れを改める作業が進んでいる。なお、これらの研究動向および内容検討は先に上げた阿部生雄の「補遺」が詳細におこなっている。

以下には、最近の英国におけるスポーツ社会史研究書を上げておきたい。N. エリアス、E. ダニングの『興奮を求めて—文明化過程におけるスポーツとレジャー』(Norbert Elias, Eric Dunning, Quest for Excitement: Sport and Leisure in The Civilising Process, Blackwell Publishers, 1986, Published in paper 1993)、R. ホルト(R. Holt)の『スポーツと英国近代史』(Richard Holt, Sport and the British: A Modern History, Clarendon Press Oxford. 1989)、T. メイソン編による『英国スポーツ史』(Tony Mason, ed., Sport in Britain: A Social History, Cambridge University Press, 1989)、D. ブレイルスフォードの『英国スポーツ社会史』(Dennis Brailsford, British Sport: A Social History, The Luttermworth Press, 1992)、またフェミニズム運動の流れから女性スポーツの存在を強調するジェニファー・ハーグリーブスの『女性スポーツ』(Jenn

ifer Hargreaves, Sporting Females : Critical issues in history and sociology of women's sports, Routledge, 1994) などがある。

### ③フランスの流れ

この流れは、フランスでもJ-M. ブローム (J-M. Brohm) らによって展開される。彼は、博士論文をまとめて、というより既に出版してからそれを申請したというフランスでは異例の論文『スポーツの政治社会学』(J-M. Brohm, Sociologie politique du Sport, Jean-pierre delarge éditions universitaires, 1976) で近代スポーツの特徴を、資本主義的産業社会の性格を持つ効率性、記録性、競争性として捉え、スポーツが国家イデオロギーの装置として、社会的な気晴らしとしての”民衆の阿片”の役割を果たしていると批判する。

ちなみに、彼は、大著『スポーツの政治社会学』(第二部pp. 161-292) で、スポーツ体制の3大機能を以下のように章立てして批判的分析を試みている。

(I). 経済的機能(スポーツの資本主義的組織機構) : この組織機構は、利潤の競争から競争の利潤化へとスポーツを利潤の対象としていくもので、資本主義社会下で利潤獲得システムに沿ってスポーツが機能する。スポーツは、資本主義的商品社会に組み込まれ、スポーツスペクタクルとして商業主義化され、スポーツ企業として成立し、スポーツサラリーマンを生み、広告・宣伝媒体となり、チャンピオン賞金というスポーツ価値の商品化をもたらす。

(II). 社会政治的機能 : この機能は、国内的政治と国際的政治の二機能に分けられる。

①国内的政治的機能としては、スポーツの競争的機能が、確立された秩序への執着と同一化を可能にし、スポーツの統合機能が、資本主義体制(あるいは国家資本主義体制)への同化を図り、スポーツを〈民衆の阿片〉として国家・公権力は、マスメディアを使い、国民の白痴化と脱政治化を図る。さらにスポーツ実践(例えば、ツール・ド・フランス)そのものが公権力下においてしか行われず、公秩序の維持にと都合にはたらく。ま

たスポーツと階級融和、スポーツと産業の協力関係など体制維持にとってスポーツの果たす役割は大きい。

②国際的政治機能としては、平和共存におけるスポーツ外交、スポーツ拜外主義にもとづく国家威信と結びついたナショナリズム機能を発揮する。

(III). 大衆コミュニケーション手段における神話的機能 : これは、大衆のスポーツセレモニーの中に祭礼的スポーツ秩序を内在させており、大衆動員を容易に可能とし、イデオロギーのファッション化を公然と進めることができる。さらにスポーツ・スペクタクルがマス・メディアによって増幅され、スポーツの大衆心理機能を刺激し、スポーツを大衆社会のエネルギーのはげ口として作用させる。こうしてスポーツ神話がシンボル要素として機能してくる。

フランスでの近代スポーツ批判への取り組みは、アメリカと同じようにその前段階として余暇問題への関心から始まると見てよいだろう。その先鞭を付けたのは、J. デュマズディエである。彼は、アメリカの50年代の「大衆文化論」、「大衆レジャー論」に啓発されながら、そこに見られる「方法論、経験的データによる裏付け、解決策の欠如を看破し」(牛島千尋「記者あとがき」; J. デュマズディエ・牛島千尋訳『レジャー社会学』社会思想社、1981、p. 389)、1953-73までの20年間にわたる調査を通して「余暇」の積極的な意味付けを行った。1962年に『余暇文明へ向かって』(中島巖訳、東京創元社、1972; Vers une civilisation du loisir?, Editions du Seuil, 1962) を、そして1973年には『レジャー社会学』(牛島千尋訳、社会思想社、1981; J. dumazedier, Sociologie empirique du loisir; Critique et contre-critique de la civilisation du loisir, Les Editions du Seuil, 1973) を著し、余暇を「自由時間」として「生活の質」を作り出す概念として規定した。その後、彼は、この自由時間の積極的な活動にスポーツの果たす役割を求め、スポーツ社会学への接近を強めることになった。

フランスでもスポーツ社会学への接近は、社会学から始まる。1964年、G. マニャンヌは、今日の文化状況の中でスポーツが余暇の増大につれて膨れ上がってきているこれらの現象に対し、すでにアメリカでは学問的研究に着手しているにもかかわらず、フランスでは未着手であるとして『スポーツ社会学』(G. Magnane, Sociologie du sport ; Situation du loisir sportif dans la culture contemporaine., Gallimard, 1964) に取り組んだ。ついで1966年J. メイノーが、広がりつつあるスポーツの背後に公権力の意図が見えかくれしていることを国内外のスポーツと政治の関係から暴いた『スポーツと政治』(J. Meynaud, SPORT ET POLITIQUE, PAYOT, PARIS, 1966) を著した。さらにM. ブエがスポーツを経済的、社会的、文化的、美学的現象として捉え、性・年齢・プロ問題からスポーツの価値・機能、政治の関わりなど総合的な社会科学的分析を試みた一大著作『スポーツの意義』(M. Bouet, Signification du sport, Editions Universitaires, 1968) をまとめた。

その後70年代に、体育・スポーツ分野に高等教育制度が設置され、80年代にそこを育った若手研究者らの研究成果が登場してくる。それにはまた、R. トマによれば、70～80年代にヨーロッパで開催された国際シンポジウムの影響も見逃せないという(R. Thomas, Naissance, évolution et actuel de la sociologie du sport, in Sociologie du sport, Presse Universitaires de France, 1987, p. 35)。とりわけ1978年と83年のパリ(国立スポーツ・体育研究所: I N S E P) で開催された第7回「国際スポーツ史学会」(HISPA) 及び第8回「国際スポーツ社会学会」(ICSS) での社会学者P. ブルデュー(P. Bourdieu) による講演「人はどのようにしてスポーツ好きになるのか?」(P. Bourdieu, "Comment peut-on être sportif?", in Questions de sociologie, Les Editions de Minuit, 1980. 田原音和訳「人はどのようにしてスポーツ好きになるのか?」田原音和監訳『社会学の社会学』藤原書店、1991。なお同者訳で「どうしたらスポーツマンになれるか」[栗原木杉他編

訳『身体政治技術』新評論、1986]があるが、前者の訳の方が正確な表現)、「スポーツ社会学のための計画表」(P. Bourdieu, Programme pour une sociologie du sport; in Choses dites, Les Editions de Minuit, 1987, pp. 203-216. 石崎晴己訳『構造と実践』新評論1988。なお国際社会学会での講演テーマは、'Sport, classes sociales et sub-culture. フランス社会学会誌の収録テーマは、「スポーツと現代社会」: Sports et sociétés contemporaines, Société française de sociologie du sport, 1984, pp. 323-331) は、スポーツ社会学研究に大きな影響を与えることになった。

P. ブルデューは、彼独特の社会学的手法から、階級社会における文化獲得・創造のメカニズムがスポーツ実践において見事に映し出されることを言っていたが、彼のこの仮説を、P. ポシェロ(C. Pociello: フランススポーツ社会学会会長)、J. ドッフランス(J. Defrance: 同副会長)らは具体的にスポーツ実践の分析において論証を試みたのである。P. ポシェロは、『スポーツと社会』の中でスポーツ実践と社会的階層との関係をスポーツの内的な技術構造の中に見ようとした。(C. Pociello, éd., Sport et société: Approche socio-culturelle des pratiques, Editions VIGOT, 1981)。ただし、この分析については、「あまりにも簡単に決定づけすぎている」とJ-M. フォール(J-M. Faure) から批判されるのを始め、ラグビー関係者から多くの反論がなされている。(R. Thomas, op. cit. p44)。またJ. ドッフランスは、社会的階層的に規定されてきた種目、例えば、労働者が行ってきた、厳しい禁欲的な陸上競技の長距離走種目が、今日では健康維持やストレス解消などのスポーツに形を変え富裕階層でも実践してきていることを、技術的・組織的構造分析から明らかにしている。(J. Defrance, Caracteristiques motrices et cracterisitiques symboliques d' une pratique sportive. La course de fond, in Sports et société contemporaines, INSEP, 1984)。

Y. ルポガン(Y. Le Pogam) もポシェロと同様に

社会階級とスポーツ種目選択の関係を論じ、画一化しているかに見えるスポーツ実践に対する曖昧な態度やイデオロギーの再評価を試みた。『スポーツの民主化：神話それとも現実』(Y. Le Pogam, Démocratisation du sport: mythe ou réalité?, Editions Universitaires, Jean-Pierre Delarge, 1979)の中で、上流階級にあっては、友好関係やレジャーの楽しみでしかないスポーツであっても、労働者階級にとっては、職場や、学校がスポーツ実践の場となっていることを指摘し、スポーツへの見直しを迫った。

その他、新製の体育・スポーツ研究システムから若手の研究者が登場し、研究対象が広領域化し、社会文化的研究手法などの新たな研究方法が用いられ、スポーツ現象を多面的に分析してきている。その成果は国立スポーツ・体育研究所に提出されたメモワール(ディプロム取得論文)から容易に知ることができる。以下はその研究者および研究論文名の数例である。J-P. クレモン(J-P. Clement)「三つの武道の比較研究：レスリング、柔道、合気道」(Etude de Comparative de trois arts martiaux: lutte, judo et aikidou, Mémoire INSEP, 1980)、J. ブルアン・ル・バロン(Blouin Le Baron)「身体表現；その活動と参加者の社会文化的分析」(J. Blouin Le Baron, L'expression corporelle: analysé socioculturelle de ; 'activité et de ses pratiquants, Mémoire INSEP, 1981)、A. ラピエール(A. Lapierre)「野外スポーツと社会的実践：カヌー・カヤックと岩登りの社会文化的分析」(A. Lapierre, Sports de pleine nature et pratiques sociales: analyse socioculturelle du canoe-kayak et de l'escalade, Mémoire INSEP, 1981)、P. フラ(P. Flat)「ヨットのクルージング航海の社会文化的決定要因」(P. Flat, Les déterminants socioculturels de la pratique de la navigation de croisière à voile, Mémoire INSEP, 1980)、B. カヴィグリオリ(B. Caviglioli)「体育・スポーツにおける成人及び成人前期のスポーツ動機」(B. Caviglioli, Motivations sport: ves des adolescents et pre-

adolescents en EPS, Mémoire INSEP, 1973)、B. ドゥルタン(B. Deletang)「スポーツ、歴史、イデオロギー：フランスの労働者スポーツ」(B. Deletang, Sport, histoire, idéologie : l'exemple français du sport travailliste, Mémoire INSEP, 1979)。

80年代には、スポーツ現象の拡大につれて研究領域も広がりを示す。スポーツ教育学、スポーツ心理学、スポーツ歴史学、スポーツ政治・社会学、に加えてスポーツ経済学(C. Malenfant-Dauriac, L'economie du sport en France: un compte satellite du sport, Editions Cujas, 1977/W. Andreff, J-F. Nys, Economie du sport, que sais-je?, 1986: 守能信次訳『スポーツの経済学』白水社, 1991/W. Andreff ed., Economie politique du sport, Dalloz, 1989)、スポーツ人口地理学(A. Haumont, Contribution de la demographie et geographie humaine a l'analyse du sport, in Sciences sociales et sports ; etats et perspectives, Actes des journées d'études de Strasbourg 13 et 14 novembre 1987)、スポーツ法学(P. Isort ed., Les problemes juridiques du sport ; responsabilite et assurance, Economica, 1984/F. Alaphilippe, J-P. Karaquillo, L'activite sportive dans les balances de la justice, Dilloz, 1985/P. Collomb ed., Sport, droit et relations internationales, Economica, 1988/J-B. Paillisser, Le droit sociale du sport, J. delmas et Cie, 1988/F. Alaphilippe, J-P. Karaquillo, Dictionary juridique sport, Dalloz, 1990/D. Remy, Le sport et son droit; introduction au droit des institutions sportives, Editions Romillat, 1991)、スポーツ人類学(J. Ardoino, J-M. Brohm ed., Anthropologie du Sport; Perspectives critiques, Actes du colloques Paris Sorbonne 19 20 Avril, 1991)などの研究が次々に公表され始めている。

④日本の流れ：現代スポーツ論検討に向かって  
そして日本では以下のような近代スポーツ批判の取り組みが戦後なされている。ただし、欧米諸

国のようにスポーツ社会学研究の概要を整理したものがない（わずかに菅原禮の「スポーツの社会的理解」『スポーツ社会学の基礎理論』〔不昧堂出版、1984〕に米国のスポーツ社会学研究の歩み、が紹介されているに過ぎない）ので、ここでは、新たなスポーツの誕生に向かって近代スポーツを批判的に検討した諸論文や文献を検討していくことにする。

60年代以前のもものとしては、戦後直後に発刊された『体育評論』第一号（1950）の山本正雄論文「スポーツ・アマチュアリズムについて；特にスポーツ史的考察を中心として」などは資本主義的スポーツの問題を理論的に解明している点で先行研究として位置づけておく必要がある。（山本正雄『スポーツの社会的経済的基礎』道和書院、1975）

さて60年代に入って、丹下保夫は、戦前の学校体育が背負われた軍国主義体育の悲惨な過去から脱却を図り、民主的で文化的な学校体育のめざし、学校体育がそれまでのような身体の教育や身体を通しての教育でなくスポーツや武道などの運動文化そのものを教える教科であるとして運動文化論を提唱した。この運動文化論は『体育原理』（上、下）（逍遙書院、1961）及び『体育技術と運動文化』（明治図書、1963）で展開されている。運動文化論の展開にあたって問題にしたのは、「運動文化と人間形成」であるがそのキー・コンセプトは「『ひま』が人間をつくる」である。すでに見たように欧米諸国で余暇への関心が学問的に取りあげられ始め、我が国では社会学者らによって注目され始めたばかりであり、体育・スポーツ分野では嚆矢であった。丹下は、労働者を中心とした国民大衆がスポーツを享受するために、近代スポーツに詰め込まれた様々な価値、機能、社会的役割などを整理し、プロスポーツをも含めたそのあるべき体制の創造の必要性を説いている。（注：主だった論者と著作年表：別表）

菅原禮は、スポーツ社会学研究の流れを概観し、近代スポーツ批判の観点が希薄である我が国では、竹之下休蔵『スポーツの社会学』（1965）がスポ

ーツ社会学の始まりであり、それ以前に加藤橋夫『スポーツの社会学』や生活科学調査会編『スポーツの社会学』は定義が曖昧でスポーツ社会学を明確に視野に入れたものになっていないとしている。（菅原禮監修『スポーツ社会学の基礎理論』不昧堂出版、1984 p.15）この菅原の分析・指摘は、一面において肯首しうる。しかしそれは、「スポーツ社会学」の「社会学的研究」からみたものであり、「原理的な研究」の側面を見落としている点で、注意を要する。「スポーツ社会学」は、単にスポーツ現象の社会的解釈にとどまらず、スポーツの歴史的、原理的な研究方法をも用いた、より総合的な研究方法を必要としているからである。その点からすれば、先に示した丹下らの研究を「スポーツ社会学」の研究として看過することはできないし、今日の研究においても多様な研究方法からの接近が「スポーツ社会学」として認められざるをえないであろう。

さて近代スポーツ批判の焦点は、過度の記録・競争志向や勝敗へのこだわり、そのための「技術の高度化」と「大衆化」、そしてこうしたことに目をつけ利潤の追求を図ろうとする「スポーツ産業」や「マス・メディア」の横暴に向けられている。「技術の高度化と大衆化」問題は、60年代から本格的になされてくる。竹之下休蔵は、国際スポーツ・体育協議会（ICSPE）の「スポーツ宣言」を紹介し、「現代スポーツは、大衆化への方向と同時に技術的な層化が顕著」として技術の高度化と大衆化の分極化問題を取りあげた。（竹之下休蔵、磯村英一編著『スポーツの社会学』スポーツ科学講座10、大修館書店1965）とりわけ、両者の統一を求める立場から、「高度化」志向に走る一方で「大衆化」が置き去りにになっていることの批判が中心であった。

「高度化」と「大衆化」の「分離」状況批判さらにはその「統一」への論議が登場してくるのは、日本でも60年代である。1964年の東京オリンピック大会を契機に日本のスポーツは頂点指向の「高度化」スポーツと底辺拡大をめざす「大衆化」スポーツの統一的発展が国民的な課題となっ

てきた。しかし、そこでは頂点指向の「高度化」スポーツを推進していくことで「大衆化」スポーツの拡大が図れると考えられていた。そしてその後の多くのスポーツ社会学者や体育研究者らも両者の統一した姿を摸索してきた。しかし、そこで統一論は、「大衆化」を建て前とする「高度化」優先の統一論であり、その後の両者の調和的な統一論とは区別される。

前者の「高度化」優先における統一論は、1961年に成立した「スポーツ振興法」及び「オリンピック準備のために必要な特別措置に関する法律」に対して、積極的な評価をしている。西田泰介「スポーツの大衆化に直進」（『体育科教育』1959.4）、佐々木吉蔵「スポーツ振興法案について」（『体育の科学』1959.1）、金田智成「スポーツ振興法」（『学校体育』1961.8）などに見られる。これらの見解に対し、川口智久は、2つの法律は「建て前と本音」が一体化したもので、「建て前」としての「スポーツ振興法」の「精神は全く形骸化」しており、「本音」は「特別措置法」にあることを主張した。さらに川口は、大衆がスポーツから阻害されている状況にあり、この問題を、スポーツを取り巻く外的条件とスポーツ自体における内的要因の両面から、選手制度の復活・確立という視点に立って分析し、「大衆化」と「高度化」の矛盾を暴き出している。川口智久の「スポーツ大衆化の阻害条件、その1」（『一橋大学研究年報 自然科学研究7』1965）論文。

一方、真の両者の統一を主張する立場に立って、「高度化」と「大衆化」の分離状況の克服を問う必要から草深直臣は「スポーツの大衆化と高度化の統一」を掲げ、そのための視点を「国民のスポーツ権」論に求めた。（草深直臣「現代スポーツの構造とイデオロギー」伊藤高弘、草深直臣、金井淳二編『スポーツの自由と現代』上、青木書店、1986）この「大衆化と高度化の統一」論は「スポーツ権」論の主張に向かって説得力を持つことになった。

しかし、スポーツの「高度化」と「大衆化」の「相互規定や有機的関連」は検討されてきている

ものの、「高度化」および「大衆化」それぞれについての「課題や目標」が論議されず、両者が論理必然的な関係において「有機的関連」をもつことを明かにし得ていない。ここにこの「統一論」の問題が示される。（唐木国彦「今日における技術の高度化と大衆化論」『スポーツのルール・技術・記録』創文企画、1993. p. 158）

中村敏雄も早くから近代スポーツへの批判を投げかけてきた。丹下保夫同様スポーツが人間形成的機能を失い、競争に走り、技術の高度化を志向することでますますスポーツは人間から離れていくと。そしてそもそも近代スポーツとは何かをその歴史的社会的形成過程から丁寧に解きほぐす作業に取り組んだ。（『近代スポーツ批判』三省堂、1969、『オフサイドはなぜ反則か』三省堂、1985）そして『スポーツの風土』（大修館書店、1981）では日英米の比較スポーツ文化から「スポーツの止揚」を求めて「『近代』の克服」と「文化創造への展望」を提起している。

80年代に入ってからスポーツ状況は、近代スポーツの高度化と大衆化の二極分解化の拡大とそれを阻止し国民のスポーツ権の問題として両者の統一を求める運動とが激しい展開を見るに至る。その一方で、近代スポーツそのものの再考論が浮上してきた。野々宮徹、寒川恒夫、稲垣正浩らによるスポーツ文化人類学などの登場とともに文化（スポーツ）の相対性が強調され、地域や特定の社会に存在するスポーツ（民族スポーツなど）への見直しが始まったからである。（寒川恒夫編『図説スポーツ史』朝倉書店、1991）

稲垣正浩は、野々宮が用いた「マージナル・スポーツ（周縁スポーツ文化）」論（「バスク民族のスポーツ」『体育科教育』大修館書店、1982.4, p. 71）をさらに整理し、今日世界に存在するスポーツを「中心」＝近代スポーツと「周縁」＝マージナルスポーツに大きく二分し、脱「中心」、向「周縁」を説いた。（「近代スポーツの誕生とその背景」岸野雄三編著『体育史講義』大修館書店、1984, pp. 95-107）。この考えは、やがて、「ニュースポーツ」の可能性を展望する中で、近代スポ

ーツを「上昇志向スポーツ」とし、ニュースポーツを近代スポーツの「アンチ・テーゼ」としての「下降志向のスポーツ」と定義し両者が「霊的世界」を結節点とする大きな「円環」をなすとする「ホーリスティックなスポーツ文化像」を描くに至る。(稲垣正浩「あとがき」『スポーツを読む』Ⅲ、三省堂、1994)

この近代スポーツの捉え方に対しては、功力俊雄が「スポーツにおける『中心と周縁』論の検討」(『スポーツの自由と現代 下』)で野々宮徹の「マージナル・スポーツの発想」(『体育史講義』岸野雄三編、大修館書店、1984)と合わせて稲垣らの「中心・周縁」スポーツ論を近代スポーツを相対化し、「近代スポーツの自由、自主、自治、自律といった基本原理」を軽視しすることになると批判している。(功力、前掲)

稲垣らは、近代スポーツの陰に隠れていた民族スポーツにスポーツ人類学的な視点から焦点を当てようとするのだが、それは当然スポーツ概念の定義にも絡む問題をはらむ。スポーツ概念の捉え方がいままさに問われているのであるが、その概念把握の方法について、佐伯聰夫は、スポーツは「歴史的普遍化概念」であり唐木国彦の「運動文化」概念(「運動文化」岸野雄三編『最新スポーツ大事典』大修館書店、1987)におけるスポーツ把握を歴史的「固有化」概念としてとらえ、これを区別して論じることの必要性を説く。それは、近代スポーツを「西欧的意図」のもとに「歴史的発展を一元的に捉え」るのではなく、「文化的多元主義の主張と深く関わって」「共時的分析」をも必要とするからであると主張する。(「スポーツ社会学が描く近代スポーツ」『体育の科学』1994.9, p.712)ただし、佐伯があえて唐木のスポーツ概念との区別を主張するほどには、両者の主張の相違は鮮明でなく、「スポーツ」と「運動文化」というタームの用い方の問題に過ぎない。

佐伯のスポーツ概念へのこだわりは、スポーツに関する「共時的分析」の必要性を説くことから起こってきているが、スポーツ概念問題は、新たなスポーツ現象をも視野に入れたより総合的な検

討を必要としているのであるから、「通時的」・「共時的」分析だけでなく、「文化的・機能的価値」分析からも検討されなければならないのである。その意味では、文化的・機能的価値を問題とする現代スポーツへの展望やそのあり方が論じられなければならない。

そこでスポーツ概念に関わる総合的な検討への試みを見ておきたい。佐伯は、他の論文(「スポーツに未来はあるか」『体育科教育』1992.1, p.13)で、「コーポレイティブ・スポーツ」と「ニュー・スポーツ」コンセプトを用い、前者はa競争からの開放、bルールの非固定化、c誰もが参加、d攻撃性の排除を、後者は、a Play Hard, Play Fair, Nobody Hurtの精神、b芸術性・表現性・創造性を含む総合的な身体活動、c祭要素、d自然・環境保護、e誰もが参加可能、f非優劣観念、g個人の自主性・創造性をもったものをイメージしている。しかし、近代スポーツとの共存関係は視野に入っていない。むしろその否定の上に描かれている。曰く「サイエンスとテクノロジーでどんなに文明性を粉飾したとしても、インダストリアリズムの延長にあるスポーツは野蛮なものである。」(佐伯聰夫、同上)

これに対して唐木は、近代スポーツのもつ問題性を克服するためには、「達成原理」から「快楽原理」への転換が必要であるとし「やわらかいスポーツ」概念を提示した。(唐木国彦「『やわらかいスポーツ』の台頭」『やわらかいスポーツ』窓社、1990)彼は、近代スポーツを「硬いスポーツ」とし、これを全面否定するのではなく「原理的批判」に立って「多様性」を共有する新しいパラダイムとしての「やわらかいスポーツ」論を提起している。

また中村敏雄は、「やさしいスポーツ」を新しいスポーツ概念に当てている。(中村敏雄『スポーツルールの社会学』朝日新聞社、1991)

これらの概念が稲垣や寒川らが主張する「マージナル・スポーツ」論と一見類似しているかに見えるが、その文化の歴史的社会的位置づけにおいて、その根底に根本的な相違があり、今後検討を

要する問題として見なければならぬであろう。

ところで、近代スポーツの歴史的固有性の主張は、早くから中村敏雄も行っている。「スポーツ」というものは「近代的な性格をもった運動の様式」を意味すると。（『近代スポーツ批判』三省堂、p.14）。それには、「祭儀として行われた行為を、それが形態上の類似性や近似性をもつという理由からスポーツの範疇に含めるのは現代人の恣意ともいうことができ、祈りの行為とスポーツを同一視することは、スポーツ概念の不当な、あるいは不要な拡大・延長ともいうことができ、これによってスポーツ概念の拡散や不透明さが生じており、早晚、これはその区別と連関を明瞭にしなければならぬ問題である。」（『オフサイドはなぜ反則か』三省堂p.203）という明確な主張があるからである。

スポーツの歴史的連続性を主張する稲垣正浩は、ニュースポーツや民族スポーツへの思い入れが強く、近代スポーツもニュースポーツも「霊的世界」が「結節点」となり、宗教性を排除できない性格を持つというのである。〔注 稲垣正浩は、『スポーツを読む』Ⅱ、Ⅲの「あとがき」で以下のようにいう。「1992年11月に行われた日本スポーツ史学会シンポジウム『ニュースポーツとはなにか』で「『ニュースポーツとはなにか』・・・その一つの可能性として筆者は『下降志向のスポーツ』（あるいは『霊的世界に接近するスポーツ』）の存在を指摘し「近代スポーツを『上昇志向のスポーツ』と定義づけ、そのアンチ・テーゼとしてその対極に『下降志向のスポーツ』を位置づけ、その可能性を問いかけた」（p.264）

「ホーリスティックなスポーツ文化」

「『上昇志向のスポーツ』（近代スポーツ）と『下降志向のスポーツ』」とが『霊的世界』を結節点とする大きな『円環』」（p.267）

「『下降志向のスポーツ』とは、・・・肉体の働きをあるレベルでコントロールしたり、徐々に低下させていくことによって、『空の境地』に入っていこうとするスポーツのこと・・・あるいは、もう一つのエネルギーといわれる『気』エネルギー

を開発・促進させるスポーツ」（p.266）]

この思想は、中村敏雄の問題意識と真っ向から対立する。中村はいう。「人類は次第に自然や社会についての認識を深め、呪術的世界を脱出するが、それは呪術的行為とそれへの期待や結果との間に不信が生じたことを意味し、こうして祭儀は次第にその形骸化を深めていく。」（同上、p.204）中村は、このようにして近代スポーツの歴史固有性を、祭のフットボールから近代のフットボールへの変化過程の分析・整理を通して以下のようにまとめる。

「このような（祭のフットボールから近代のフットボールへの＝引用者）質的転換は、『具体から抽象へ』、『土着から普遍へ』、『非秩序から秩序へ』、そして少し意味が異なるが『非日常性から日常性へ』、『現実から非現実へ』という方向で進化した」（p.205）あるいはまた、「スポーツ一般も、『祈り』から『遊技』へ、そして『競争』へと転換を遂げ、その性格も『日常の支配』から『半日常性、あるいは半非日常性』へ、そしてさらに『非日常性』へと変わったのであり、それはまた『現実性から非現実性へ』という変化でもあった。」（同上、p.208）

近代という固有の歴史・社会の中でスポーツの変化を考える。これが中村の手法である。「競争の渦中にある現代人が、より人間らしいスポーツの創造に向かって歩み出す方向は」「『具体から抽象へ』、あるいは『土着から普遍へ』という変化」が「歴史の中でどのようにあられ、発展したのか」という課題の解明の中からえられるであろうと指摘する。（同上、p.211）

以上、欧米諸国ならびにわが国における近代スポーツ批判に関する研究状況を概観してきたが、これらの研究が、現代スポーツを積極的に理論づける内容までには至っていない。また、それらが、障害者、高齢者、女性、子どもなど社会的弱者や性、人種問題との具体的な関係で論じられているものは少ない。今後、こうした具体的な問題との関係で検討がなされていくことになる。